



医学研究科に北海道臨床開発機構設置

ー オール北海道の橋渡し研究拠点ー

医学研究科長 本 間 研 一

北大医学研究科を中心とした道内3医育大学（北大医学研究科、札幌医科大学、旭川医科大学）による大型研究「橋渡し研究支援推進プログラム」が開始されたことはすでにご存知のことと思いますが、この度、本プログラム推進の総司令部として、北大医学研究科に「北海道臨床開発機構」が設置され、機構長には私が、副機構長には白土副研究科長が就任しました。機構には、意志決定機関である運営委員会の他、橋渡し研究（TR）推進部と臨床治験管理部、倫理委員会の3つの実務部が置かれます（図1）。北海道臨床開発機構は、3医育大学の研究者や既設の治験センター、知財本部などと連携し、さらに全道600の医療機関とネットワークを形成して、全国で初めて地域規模の拠点形成を目指します。拠点形成は5年計画で、年間予算は2億6千万円強です。

本プログラムの目的は、個々の研究に対して資金を提供するのではなく、大学等に眠っている研究成果（シ

ズ）を発掘し、有望なシーズを製品化に向けて加工する一連の作業（研究）のシステム化であり、体制作りです。橋渡し研究には、シーズ発掘、シーズが薬物などの場合は体内動態などの検査、シーズ最適化、シーズ安全試験、市場調査、世界基準に基づいたシーズ管理（薬品の場合は生産）、前臨床試験、薬事法に則った臨床治験などの過程が含まれます。この中で、シーズ発掘には長年橋渡し研究に携わっている専門家の目が必要で、その様な人材（目利き）は大学にはいません。また、シーズ最適化や安全性試験、世界基準に基づくシーズ管理には莫大な経費がかかり、研究のかなり初期から企業の協力がなければ製品化は難しく、優良なシーズを企業に売り込む広報・渉外の専門家も必要となります。また、知的財産権の保護や利益相反などの問題を扱う専門家も必要です。さらに臨床治験では、治験プロトコルの作成、データ管理、薬事、生物統計学の専門家が必要です。最後に、これらの事業の事務・経理を司る部署が必要です。これらの人材はほとんどすべて医学研究科以外の部局や学外に求めなければなりません。

本拠点の本格的稼働にはほぼ3年かかると考えています。橋渡し研究は初めての経験ですが、昨年採択された大型研究「未来創薬医療イノベーション拠点形成」と対になる研究でもあり、医学研究科をあげて支援していきたいと考えています。

注）「未来創薬医療イノベーション拠点形成」：国と企業が同等の立場で推進する新しい形の産学官連携プログラムで、平成18年度全国の9の大学で拠点形成が認められました。北大では、医学研究科と先端生命科学研究院が日立製作所、塩野義製薬と共同して申請し、採択されています。

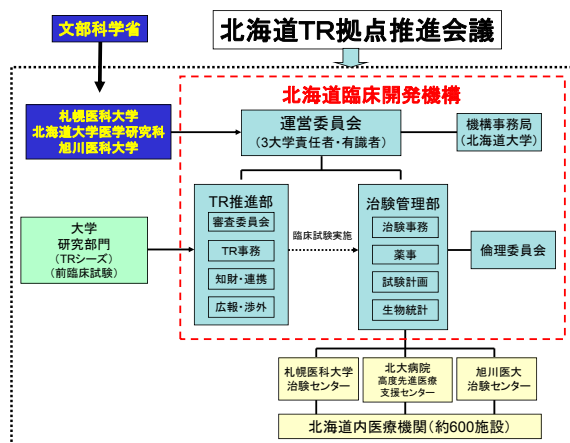


図1 オール北海道TR

がんプロフェッショナル養成プラン

副研究科長 白 土 博 樹

平成19年文部科学省「がんプロフェッショナル養成プラン」は、日本で人材が不足している放射線治療や化学療法や緩和医療に関するがん専門医等を養成し得る内容を有する優れたプログラムに対し財政支援を行うことにより、大学の教育の活性化を促進し、今後のがん医療を担う医療人の養成推進を図ることを目的とし、大学改革推進等補助金により5年間にわたり補助がなされます。全国で18拠点が選定され、北海道では、札幌医科大学、旭川医科大学、北海道医療大学と北海道大学が連携し「北海道の総合力を生かすプロ養成プログラム－大学、地域、病院の連携を生かしたがん専門医療人の育成を目指

して」をオール北海道体制で今年度より行ないます。具体的には大学院間の教育での単位互換を加えた合同カリキュラムを導入したがんプロフェッショナル養成のための体系的コースを設定します。また、地域の拠点病院と連携した実習や実地修練をはじめ、より地域実態に即した実践的な取組を行うとともに、インテンシブコースで地域の職能団体や行政と連携、遠隔教育や出前講義なども実施、地域の専門家を育成します。特に、北海道大学では、がん関連専門医のほかに、総合大学の特長を生かし、工学部と連携して、医学物理士養成コース、薬学部と連携して、がん専門薬剤師の養成も行ないます。

第1回医学部フラテ祭開催される

医学部フラテ祭実行委員会事務局

去る9月22日（土）の午後から、第1回フラテ祭2007が管理棟・医学部図書館で開催され、同窓生、教員、学生、学生父母、企業関係者など130余名が参加しました。

第一部の講演会では、本間医学部長が「北大医学部の近況と展望」、浅香北大病院長が「荒波に揺れる北大病院」、長瀬北海道医師会会長が「北海道の医療の現状と対策」と題して、それぞれ30分ずつ講演されました。講演会場の基礎第二講堂は100名あまりの聴衆で埋まり、法人化後の医学部、大学病院における研究教育や診療の実体、北海道地域医療の問題点などに熱心に聞き入っていました。

第二部のラボ・キャンパスツアーには50名ほどが参加し、日頃見ることのできない研究施設や病院、久しぶりの北大キャンパスなど、午後の一時を楽しまれていました。特に病院ツアーは、企業関係の参加者に人気がありました。教員の先生や学生さんによるコンダクトが印象的でした。

第三部のフラテ交歓会は、図書館3階の第一会議室で行われました。交歓会に先立ち、医学部創立90周年事業に対し多額のご寄附のあった個人や企業に、本間研究科長から感謝状の贈呈がありました。交歓会では、札幌フラテ支部に贈呈されるフラテ旗の披露があり、今後順次設立されたフラテ支部に寄贈されるとの説明がありました。交歓会では、吉岡副研究科長率いるカルテットが「都ぞ弥生」の演奏で参加者をお迎えし、またモーツァルト弦楽四重奏など本格的な演奏で、会の雰囲気盛り立て

て下さいました。学生さんの司会による北大グッズ抽選会では特賞の「ソーセージとハムの詰め合わせ」を当てた同窓生が大喜びでした。最後は、参加者全員がスクラムを組んで、北大医学部スキー部部員の前口上による「都ぞ弥生」の合唱で締めくくりましたが、興に乗って歌詞の2番まで歌ってしまいました。ただ、2番の歌詞まで正確に覚えていた方はごく少ないと思われました。

「医学部フラテ祭」は、これまで希薄であった同窓生や学生父母、企業の方々との結びつきを密にし、北大における医学教育や研究、診療の成果をつぶさに見て頂くことにより、医学部の抱負や課題を認識して頂くことにあります。講演会やラボ・キャンパスツアーはその様な目的で企画されました。「祭」でありますので、楽しいことが第一。フラテ交歓会で、歌舞音曲、抽選会など「祭」の要素を加えて、盛り上げました。今回の成功の裏には、



研究科長秘書室に着任したばかりの、90周年記念事業担当・小橋香織さん以下実施スタッフの奮闘がありました。

来年の「フラテ祭」は、連休の中日平成20年9月14日（日）です。是非、お楽しみに。

医学研究科・医学部医学教育支援室の設置について

医学教育支援室副室長 野々村 克 也

近年のコアカリキュラム導入による全国医学部教育の画一化、臨床実習重視という大きな流れの中、当学部では医療システム学の前沢教授を中心とした医学教育開発室に対応して頂いてきました。一方、大学の法人化とともに生じている定員削減策により特に医学教育には欠かせない解剖系技術職員の人員確保が難しくなるという事態が生じてきております。こういった医学教育に関連する様々な問題に幅広く対応するために、医学教育開発室を発展させる形で医学教育支援室が出来ました。

室長は研究科長が充たり、副室長は研究科長補佐の私が兼務しております。専属室員として小華和征志准教授、伊敏助教がおり、それを指導・支援していただく立場に腫瘍外科学の近藤哲教授、医療システム学の前沢政次教授、川端秀伸助教がいます。さらに、系統解剖・法医解

剖・病理解剖それぞれの業務を担当している技術職員が加わった人員で構成されております。

その任務として、まずFDの実施を支援することがあげられます。実際に今年の8月に教育ワークショップを行い、それに基づき現在医学部医学科教育新カリキュラム立案の支援をしております。その他に、ECE、CBT及びOSCEなどの授業システム実施の支援を担当しております。また、解剖業務支援グループを組織し、個々の解剖業務が円滑に行われるようにする業務も担っております。まだ発足して間もない組織で十分な活動体制にあるとはいえませんが、本医学部の教育の充実を目指していきたいと思います。教員皆様のご指導・ご協力を宜しくお願い致します。

医学研究科・医学部学生教育ワークショップ2007

医学教育支援室副室長 野々村 克 也

FDの一環として行われる教育ワークショップが去る2007年8月17日・18日の2日間、月形町「はな工房」で行われました。この度、学士編入制度の一部が変更され、今回から2年次後期に入学することになり、基礎医学教育を半年早く開始することが可能となりました。したがって、従来臨床実習重視のカリキュラムで圧迫されていた基礎医学系カリキュラム枠を拡大することが可能となります。こういった事情を踏まえ、今回のワークショップでは基礎医学系カリキュラムの見直しに視点を据えた新カリキュラムの作成という実践的な問題に取り組むこととなりました。このような背景から、本間医学部長を筆頭に参加教員35名中17名（うち基礎医学系12名）の教授の参加が得られました。

一日目は、まず本間医学部長がこれまでの本学医学教育カリキュラムについて解説され、上記に述べたような本ワークショップの意義・重要性について挨拶されました。続いて、内科分野を代表して神経内科佐々木秀直教授、外科分野から腫瘍外科近藤哲教授、専門科の分野と

して泌尿器科野々村が「臨床から基礎医学教育に求めるもの」をテーマとして講演を行ないました。その後、基礎系3グループ（生理系、病理系、社会医学系）、臨床系3グループに分かれ授業内容のすり合わせ、コマ数の調整など90分単位のグループ作業を二度行い、基礎系・臨床系双方の新しいカリキュラムの大枠が立案され、参加者の納得する内容が得られたと思います。

夕食後のフリーディスカッションでは今後学部教育に取り入れられるMD-PhDコースについて吉岡教授から解説があり、そのあり方について熱く意見が交わされました。

二日目はまず前沢教授による医学教育概念の変遷、最新の教育システム・方法論についての講義がありました。それに続いて前日の討論をもとに基礎系・臨床系カリキュラム改変に際し内容のより充実を図るべく新しい科目についての模索がなされるとともに、成績評価や進級要件についても討論がなされました。

現在、このワークショップに基づき、医学教育支援室

を中心に平成20年度以降の新カリキュラムの草案を作成中であります。教員皆様にはご意見がございましたら是非支援室の方へお寄せいただきたいと思います。皆様の

意見を取り入れつつ更に充実したカリキュラムを目指しております。ご協力宜しくお願い申し上げます。

第3回北海道大学医学部保健学科F D (Faculty Development) ワークショップ報告

医学部保健学科F Dワーキンググループ 教授 武田直樹

医学部保健学科では、9月14日（金）、百年記念会館において、「AO入試制度と編入学制度について考える」をテーマに、部分参加も含めて50名（全教員の66.7%）の参加者により、第3回医学部保健学科F Dワークショップを開催しました。

プログラムの前半は2つの基調講演及びミニレクチャーが行われました。基調講演1では、高等教育機能開発総合センター池田文人准教授より「社会に接続する

教育～学力世界一のフィンランドに学ぶ～」という題で、日本とフィンランドの知識観の違いについて講演いただきました。続く基調講演2でも、同じく池田准教授により「伸びる学生、伸びない学生～入試の現状と課題～」という題で講演いただき、人生や進路の岐路において、自分の意志で決定することがその後の成績の伸びに関連しているのではないか、また編入試験については、編入志願者の少ない専攻や質の高い編入学者を獲得するため

表1 第3回（平成19年度）北海道大学医学部保健学科F Dワークショッププログラム
テーマ：AO入試、編入試験の意義と問題点

8:45	百年記念会館集合 受付開始
8:55	開会の辞 ガイダンス
9:00	保健学科長挨拶
9:05	基調講演1「社会に接続する教育～学力世界一のフィンランドに学ぶ～」 北海道大学高等教育機能開発総合センター 池田 文人 先生
9:45	質疑応答（10分）
9:55	基調講演2「伸びる学生、伸びない学生～入試の現状と課題～」 北海道大学高等教育機能開発総合センター 池田 文人 先生
10:35	質疑応答（10分）
10:45	〈休憩〉（10分）
10:55	ミニレクチャー1「物理におけるe-learningのめざすもの」 北海道大学大学院理学院 宇宙理学専攻 鈴木 久男 先生
11:25	質疑応答（10分）
11:35	ミニレクチャー2「保健学科におけるe-learningの実践」 北海道大学医学部保健学科検査技術科学専攻 加藤千恵次 先生
11:55	質疑応答（10分）
12:05	昼 食
13:00	報 告（30分） 「平成18年度北海道大学教育ワークショップ（全学F D）参加報告」 北海道大学医学部保健学科検査技術科学専攻 山口 博之 先生 「平成19年度北海道大学教育ワークショップ（全学F D）参加報告」 北海道大学医学部保健学科放射線技術科学専攻 横澤 宏一 先生
13:30	グループ討論・発表についてのオリエンテーション（10分）
13:40	グループ討論開始（100分）
15:20	休憩（10分）
15:30	各グループのプロダクトの発表・全体討論（90分）
17:00	閉会挨拶
	記念写真撮影



グループ討論の様子

には、もっと大学から多くの情報を発信することが重要との提言がありました。

ミニレクチャーではe-learningをテーマに取り上げ、大学院理学研究院鈴木久男准教授によるミニレクチャー1「物理におけるe-learningのめざすもの」では、鈴木准教授のe-learningのこれまでの歩みと今後の展望が示され、e-learningについてあまり知らない多くの聴衆にとって有益なレクチャーとなりました。また、ミニレクチャー2では、本学科加藤千恵次准教授により「保健学科におけるe-learningの実践」について、物理系の講義や実習を支援するためにホームページを開発・運用し、出席率向上、成績改善、および授業内容の改善があったこと、また、webを利用したプログラミング言語教育は

有用な方法であったことが報告されました。

プログラムの後半では、本学科山口博之教授による「平成18年度北海道大学教育ワークショップ（全学FD）参加報告」、また同 横澤宏一教授による「平成19年度北海道大学教育ワークショップ（全学FD）参加報告」が行われました。

続いて、「北大医学部保健学科にふさわしいAO入試制度と編入学制度」というテーマでグループ討論とその結果発表・全体討論が行われました。そこでは各小グループでAO入試制度のための募集要項（定員、求める学生像、出願資格・要件、選抜方法）を策定し、また、編入学制度ではその問題点と対策が挙げられました。

今回のFDワークショップでは、教育を広い意味で解釈し、入試制度をテーマとして取り上げましたが、本学科の多くの教員が一同に介し、入試制度を含めた学生教育に関して討論する機会はほとんどないため、貴重な機会となりました。

本学科のFDワークショップは、出席率の高いことも特徴であり、今後でもできるだけ参加者の興味にあったテーマで、多くの参加者を得て有意義な討論を行い、学生の教育に還元していきたいと考えています。

最後に、今回のFDが実り大きなものとして終了できたのは、ご多忙の中講演をいただいた池田文人先生、鈴木久男先生、加藤千恵次先生、山口先生、横澤宏一先生のお陰によるものです。どうもありがとうございました。

表2 第3回保健学科FDワークショップ総合評価

(1) 内容の価値についてどう評価しますか。	価値なし	少ない	いくらかあり	かなりあり	極めてあり
		6%	30%	52%	12%
(2) 内容に対する時間量はいかがでしたか。	多すぎ	やや多い	ほぼ適当	やや少ない	少なすぎ
		18%	79%	3%	
(3) 内容の難易をどう感じましたか。	極めて難	やや難	ほぼ適当	少し易しい	易しすぎ
	6%	9%	82%	3%	
(4) このようなWS形式の教育方法としての効果をどう思いますか	なし	少ない	ある程度	かなりあり	極めてあり
		6%	55%	36%	3%
(5) このWSの内容はあなたの興味に対して適切でしたか	全く不適切	やや不適切	ある程度適切	かなり適切	極めて適切
	3%	6%	48%	39%	3%
(6) このWSで示されたような教育学的方法を今後取り入れようと思いますか。	全くない	あまりない	少し取り入れ	かなり取り入れ	大いに取り入れ
		15%	55%	27%	3%
(7) (6)において「少し取り入れて見たい」から右の3つのどれかに○をつけた方は、現時点であなたの教育の現場で実現の見通しは？	極めて難しい	かなり難しい	一部可能	かなり可能	全面的に可能
	3%	14%	72%	7%	3%
(8) 今後ともこういうWSを持つことに対して	反対	必要なし	持ってもよい	持つ方がよい	是非持つべき
	3%	3%	30%	39%	24%

2007年度 医学部医学科オープンキャンパス

医学研究科・医学部入試委員会アドミッション実施部会 部会長 渡 邊 雅 彦

少子化が急速に進行している現在、優秀で意欲ある学生をいかに集め育成するかが、生残りをかけた大学間競争の1つの焦点となり、北大が最も力を注いでいる企画の1つである。北大合格者の4人に1人が、この企画の参加者であるというデータからもその効果の大きさが伺える。今年度から、学部紹介を行うオープンユニバーシティをオープンキャンパス（自由参加プログラム）、体験入学をオープンキャンパス（高校生限定プログラム）と呼称が変わった。病院見学を含む施設見学を組み込んでいる医学部医学科では、自由参加プログラムを8月6日の月曜日に、高校生限定プログラムを8月7日の火曜日に、他の学部・学科より一日遅れる日程で開催した。

自由参加プログラムでは、午前は定員一杯の150名、午後は119名の合計269名（昨年度は274名）と、今年も多数の参加者があった。内訳は、札幌市内109名（同140名）、札幌以外の道内89名（89名）、道外69名（44名）、その他2名（1名）と、今年は道外からの参加者が増加していた。本間研一医学部長による挨拶の後、医学部医学科紹介ビデオの映写、医学部・大学病院での教育・研究・診療の施設見学、質疑応答からなる2時間余りの企画として行った。施設見学では、参加した高校生や保護者を7つのグループに分け、医学科アドミッション実施部会員と5・6年次の医学科生がペアとなって各グループを引率し、教育施設（解剖学実習室）、研究施設（医歯学総合研究棟のオープンラボ、fMRI室、電子顕微鏡室）、診療施設（CT検査室、検査部、病理部）の7カ所を順に訪問した。訪問先では、それぞれの担当者が説明を行った。質疑応答も活発で、大学生活、北大や北大医学科の特徴や得意な部分、クラブ活動と勉学、解剖学実習で気絶するかなど、高校生が自己の進路を探るための情報を求めていることを肌で感じた。

高校生限定プログラムでは、昨年度と同様に、解剖学

の講義と実習からなる模擬授業を行った。今年は70名を限度として参加申込を受付け、62名（昨年度は102名）の高校生が参加した。札幌市内28名、札幌以外の道内20名、道外14名であった。本間研一医学部長の挨拶の後、脳に関する講義を30分程行った。その後、顕微鏡による組織プレパラート観察実習と、魚類からヒトに至るまでの脳の進化・発達や神経情報伝達に関する展示を示説する実習を行った。実習には、解剖学系3分野の教員・大学院生と医学科生が立ち会い、説明や質問への対応を行った。終了時に行った無記名式のアンケートでは、「人間の脳は重くて柔らかくて、神秘的だ」（旭川東2年、女子）、「本物の骨格や脳に触れたり、小脳やニューロンの構造を観察できたことがよかった」（札幌南1年、男子）、「脳の発達に関して、発達する期間がある事が印象に残った」（札幌光星2年、男子）、「電気刺激で手が自然に動いたことがとても不思議でした。今日は、本当にありがとうございました」（小野2年、女子）などの感想が寄せられた。また、5段階評価では、満足度の平均が4.6という非常に高い評価をいただき、理解度の平均が3.9とうれしくもありまた来年への課題かとも感じた。

最後に、施設見学で説明していただいた放射線部の渡辺良晴技師長、病理部の伊藤智雄副部長、検査部の加畑馨助手・清水力副部長、皮膚科学分野の大学院生藤田靖幸さんと保科大地さん、解剖発生学分野の深谷昌弘助教、電子顕微鏡室の中村秀樹助手、fMRI室の山本徹教授（保健学科）、に深く感謝したい。

また、施設見学で引率や質疑応答を担当したアドミッション実施部会の各部会員と中村利仁助手、高校生限定プログラムの準備と実施を担当した岩永敏彦教授・神谷温之教授はじめ解剖学系3分野のメンバー、2日に渡って大活躍した医学生（6年の大久保亮君、種井善一君、横畠絵美さん；5年の四十物絵里子さん、本間舞子さん、



オープンキャンパス（自由参加プログラム）



オープンキャンパス（高校生限定プログラム）

藤井知昭君、藤本隆憲君)、そしてこれらの企画全般の計画と運営に奔走していただいた医学科教務担当の齋藤嘉光係長、山本透主任、狩野高志さんに、厚く御礼を申し上げます。

医学研究科・医学部入試委員会アドミッション実施部会

部会長 渡 邉 雅 彦 (解剖発生学分野)

部会員 前 沢 政 次 (医療システム学分野)

部 会 員 吉 岡 充 弘 (神経薬理学分野)
〃 高 野 廣 子 (国際連携室)
〃 畠 山 鎮 次 (医化学分野)
〃 田 中 真 樹 (認知行動学分野)
〃 山 本 有 平 (形成外科学分野)
〃 秋 山 真 志 (皮膚科学分野)
〃 飛 驒 一 利 (神経外科学分野)

医学部保健学科オープンキャンパスについて

保健学科アドミッション実施委員会委員長 山 本 徹

オープンキャンパスは、大学の広報活動の一環として高校生やその保護者、市民も対象とする自由参加プログラムと、大学進学目的を明確化することなどを想定した高等学校生徒限定プログラムからなります。昨年度までオープンユニバーシティ・体験入学との名称でしたが、このような企画は一般にはオープンキャンパスと呼ばれるため、今年度より名称が改められました。保健学科を含む多くの部局では、自由参加プログラムが8月5日(日)に、高等学校生徒参加プログラムが6日(月)に行われました。しかし、自由参加プログラムの参加者も大部分は北大に興味のある高校生であり、参加者のみならず実施する側からもプログラムの違いの認識が薄れつつあります。

午前・午後2回行われた自由参加プログラム総参加者数は昨年同様400人を上回りましたが、午前の部が248人、午後の部が159人で、午前の部の参加者が昨年よりも大幅に増えたことは保健学科を第一志望とする傾向が高まりつつあることの表れかと思えます。また、札幌市以外の道内からの参加者が約半数を占めていますが、道外からの参加が昨年の30人から54人と増加傾向にあります。自由参加プログラムでは、午前・午後それぞれ約3時間の同一プログラムが繰り返されました。まず、臨床大講堂で小林清一保健学科長の挨拶に引き続き保健学科全体の紹介が行われ、その後、保健学科へ移動し、専攻探訪と称し「感染予防の技術・ベッド上の科学」、「ITで病気を見つける」、「血液や尿などからなにがわかる?」、「運動機能検査の実際」、「作業療法とは」などの30分間の説明・実習を約2時間の間にアラカルト式に3つ受講できるプログラムが実施されました。このプログラムは保健学科5専攻(看護学、放射線技術科学、検査技術科学、理学療法学、作業療法学)の中から複数の専攻を体験することができ、参加者にも好評です。全体説明を行った臨床大講堂から保健学科への移動および保健学科内での



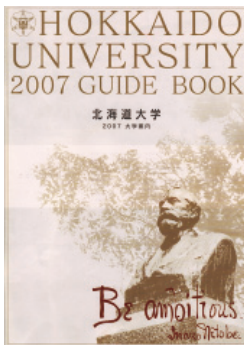
体験実習で血圧測定に挑戦する参加者

案内を3人の看護学専攻の在校生にお願いしましたが、「とても優しくてうれしかった」「わかりやすく案内してくれて有難うございました」などと非常に評判も良く、医療に携わる人材として優良な教育を受けていることを示してくれたものと思います。

月曜午後に開催した高等学校生徒限定プログラムの参加者数は昨年の約1.5倍の173人で、定員増を希望する声が上がっております。こちらは札幌市内からの参加者が多く、また、作業療法学専攻、放射線技術科学専攻、検査技術科学専攻への参加の増加が目立ちました。このプログラムでは、保健学科全体説明に引き続き、各専攻にわかれ、体験講義・実習・進路説明などが行われました。今年も多く教職員の協力のもと、オープンキャンパスが実施されましたが、参加者アンケートでは「モチベーションが上がる内容で、入学したいと強く思いました」などの回答が多く寄せられ、教職員の励みとなっています。医療の質を向上させることのできる有能な人材が北大から育って行くため、今後もオープンキャンパスが、意欲・知力ともに兼ね備えた入学者確保につながって行くことを祈っております。

「北大セミナー in 函館」に参加して

形成外科学分野 教授 山 本 有 平



当日配布された
ガイドブック表紙

北海道大学の素晴らしさを多くの高校生そして父兄に知ってもらうために、去る9月9日（日）に、函館中部高校において「北大セミナー in 函館」が開催されました。参加者は300名を超え大変盛況で、午前の部は、女性研究者支援室が主催された“見て触って感動する！北大実験屋台村”が開かれ、北大大学院生達が様々な領域の実験ブースを用意して、科学の楽しさを参加された方々に直接体験してもらいました。昼食後には、体育館にて佐伯 浩総長が北海道大学の現状と未来についてご講演され、“フロンティア精神”、“国際性の涵養”、“全人教育”、“実学の重視”という、北大の4つのヴィジョンについて力強く説明され、参加された高校生も熱心に聞き入っていました。

午後の部は、医学部を始め、全13学部より14の講座が開設され、各教室にて80分の模擬講義が2回ずつ行われ、参加者は各学部の学生になった気分を味わい、北海道大

学への憧憬を深めているようでした。私も、医学部医学研究科の開設講座を担当し、「傷をきれいに治すお医者さんー形成・再建・美容そして精神外科」と題した講義を約70名の参加者に対して行いました。以下に講義内容を掲載します。

“どうしたら、傷はきれいに治るの？”この疑問を解決するために、形成外科医は日夜研究、診療を行っています。第1部では、傷が治るメカニズム、傷跡をできるだけ残さない手術法、ケロイドとは？等について、顔面の傷、やけど、皮膚のあざ・できものに対する治療を中心に、わかりやすくお話しします。第2部では、市民の方々にとってあまり聞きなれない“形成外科”。皆さんがもたれている形成外科に対するイメージは、“傷をきれいに治すお医者さん”、または“美容外科とどう違うの？”というものでしょうか。“形成外科ってどんな病気を治すの？”という皆さんの疑問に対し、形成外科が扱う疾患を広く紹介し、患者さんのQOL：Quality of Lifeの向上に果たす役割について説明いたします。

このような広報活動が実を結び、意欲溢れる若人が北海道大学に入学されることを期待します。

医学部保健学科講座紹介「看護学専攻地域保健看護学講座」

医学部保健学科看護学専攻 教授 齋 藤 健

本学における看護教育は、1919年9月北海道大学医学部付属病院に併設された医学部附属医院開始準備のため看護法講習科設置（以後厚生女学部及び看護学校と名称変更）、同年10月の産婆養成所設置（以後助産婦学校と名称変更）に端を発し、1980年10月の北海道大学医療技術短期大学部設置により、同短期大学部看護学科として3年制の看護教育を開始し、さらに1985年4月に専攻科助産学特別専攻が設置され、看護師・助産師の養成を担った。その後、2003年10月に北海道大学医学部保健学科の設置に伴い、同学科看護学専攻に4講座9分野が置かれ、現在の教育体制となった。

地域保健看護学講座は、地域看護学分野、地域保健学分野の2分野からなり、本年10月現在、地域看護学分野には、教授2名（高波澄子、佐伯和子）、准教授1名（河原田まり子）、助教2名（上田 泉、平野美千代）、地域保健学分野には、教授1名（齋藤 健）、准教授1名（山



内太郎）が在職している。教育面では、文字通り、地域看護学、地域保健学領域の教育を担当しているが、本講座の特徴として、看護師教育と共に、保健師養成のための教育・実習を担っているところにある。前述のように、看護師、助産師の教育機関として、長い歴史と伝統を有するが、保健師教育の面では2004年4月に入学し、来年

3月に卒業を向かえる学生が第一期生という新しい教育機関である。地域保健看護学講座の教員は、看護師養成課程と統合したカリキュラムの限られた教育時間の中で、学生に保健師を如何に特徴づけ、保健師の役割をどのように教えるか、さらに、本学医学部保健学科を卒業する医療専門職として、総合的視野と専門的知識・技術を身につけ、将来、指導的立場を担う人材をいかに育成するかを常に念頭に置いて学生の教育に携わっている。

平成20年度には大学院修士課程、平成22年度には大学院博士課程の設置が予定されており、研究面では、将来の保健科学、看護科学領域の研究をリードする人材の育成することを視野においた研究活動を展開している。各教員の研究内容の詳細については、本学教員のデータベース等を参照していただくこととして、ここでは、地域保健看護学講座の分野ごとの主な研究課題を記載した。地域看護学分野では、地域保健従事者のキャリア発達と継続教育、地域の看護アセスメント、職場における

メンタルヘルスケア、地域における保健福祉活動、看護倫理、在宅ホスピスケアなどを主な研究課題として取り組んでいる。一方、地域保健学分野では、広く健康科学領域の調査・研究を展開しており、健康の保持・増進因子の同定、環境ストレスの影響評価、健康と環境に関する国内外調査、ライフスタイルと健康などを主な研究課題として取り組んでいる。

急速な少子高齢化の進展や、医療技術の進歩等、我が国の保健・医療・福祉をめぐる環境は著しく変化しており、その中でより質の高いケアを提供できる看護師、保健師および助産師が社会的に求められています。幸い医学部保健学科の設置に伴い、多くの若く優秀な人材が看護学専攻の教員として加わり、教育・研究体制が整ってきました。これから、全教員一丸となって、教育、研究両面での質の向上を目指して鋭意努力していく所存ですので、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

医学部保健学科第3回市民公開講座

「北大保健学科特別授業ライブようこそヘルスサイエンスの世界へ！

ーあなたの心身はこの現代社会を乗り切れますか？」を開催

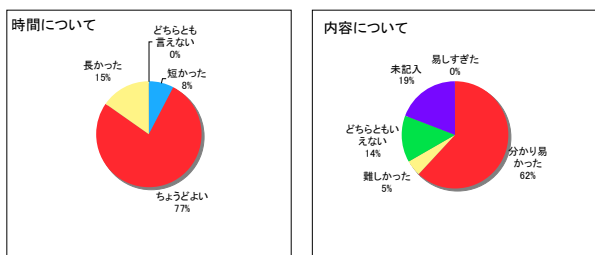
医学部保健学科検査技術科学専攻 教授 山口 博 之

近年、医学ならびにその関連領域における科学の発展は著しくそれに伴い健康への関心はますます高まっておりますが、一方で氾濫する情報を精査することが極めて困難な時代になってまいりました。このような状況下、ヘルスサイエンスに携わる保健学科は、教育・研究を通して得られた健康に関する有益な情報を社会に発信する責務があります。それ故に、保健学科では、市民の健康の維持・増進に役立てるために、本学の魅力ある教育ならびに研究の一端を年一回の割合で市民公開講座という形で開示しております。



本年度の公開講座は、平成19年9月15日土曜日午後1時より人文・社会科学総合棟1階W103教室（博物館前）にて開催いたしました。各専攻（看護学、検査技術、放射線、理学療法と作業療法）より5名のスピーカーが講演を実施し、一つの講演時間は30分とやや短いものですが、講演には実演も積極的に取り入れ、受講者と一体化した魅力ある公開講座を目指しました（写真）。講演は、“メタボリックシンドローム（千葉仁志教授）”、“あなたの脳の働きを測るには（竹内文也准教授）”、“リラクスマーブメントパート2（渡辺明日香助教）”、“腰痛との上手な付き合い方（山中正紀教授）”そして“みんなでつくろう！楽しい子育て・楽しい老後（佐伯和子教授）”といった5つの身近な話題より構成いたしました。対象者は高校生からご年配の方まで、誰もが受講できる講座といたしました。当日は悪天候にも関わらず、高校生を含む77名（内訳：一般参加者54名、教員19名、事務員4名）の参加者がありました。公演終了後のアンケート調査の結果、多くの参加者にとって本公開講座が有意義なものであったことを伺い知ることができました（図）。

公開講座の開催は、保健学科の社会的な知名度を上げるための一役も担っております。それ故に、本年度の公



開講座では、ポスターデザインの外注化、北海道新聞への折り込みチラシや札幌市公用掲示板ふれあいインフォメーション)の利用等を積極的に取り入れました。そのかい合ってケーブルテレビ（ジェイコム札幌）にも取り上げていただきましたが、参加者数には直接反映されなかったようです。高校生の参加者を募るべく市内9つの高校にもお願いをいたしましたが、年間約50件を超す北

大のさまざまな部局からの公開講座の案内の一つとして埋もれてしまった感も否めません。このように、一部局では乗り越えられない壁の様なものも感じられ、今まで以上に全学を上げての組織立った運営・実施が必要ではないかと思われます。全入学時代を向かえ、大学の生き残りを掛けた戦いは熾烈を極めております。北大もその例外ではありません。それ故に、社会との架け橋の一つである公開講座を最大限有効に活用する事は極めて重要です。今年度の公開講座が、今後の公開講座の進化を促し発展に寄与することを心より祈願いたします。

最後になりましたが、本年度公開講座は宮島直子准教授、堤香織助教、笠原敏史助教、真木誠助教ならびに山口より構成された保健学科公開講座ワーキンググループにより企画・実施されたことを追記いたします。

医学部創立90周年記念事業基金募金活動の現状 ー第4報ー

医学部創立90周年記念事業実行委員会副委員長 小山 司

日頃より医学部創立90周年記念事業につきまして深いご理解と絶大なるご支援をいただき心より感謝申し上げます。9月末現在の募金の納入状況は表のとおりとなっています。教員各役職の納入率は全てアップして、教員全体の寄附納入率は47.5%で、約半数の教員からのご協力をいただいたこととなります。教員の寄附納入率100%達成に向け今後ともなお一層のご理解とご協力をお願いする次第でございます。

前号から医学研究科／医学部広報誌上に教員寄附者のご芳名一覧を掲載し、謝意を表すことにしました。しかし、数名の方々の記載漏れと職名等のミスが明らかとなり、早速、本誌上で訂正させていただきました。関係各位に心よりお詫び申し上げます。

寄附金納入状況（19.9.30現在）

寄附金合計 191,287,556円		
◎教 員	190名／ 400名 (47.5%)	37,440,000円
(内訳) 教 授	70名／ 88名 (79.5%)	20,970,000円
准教授	32名／ 62名 (51.6%)	5,670,000円
講 師	28名／ 62名 (45.2%)	4,600,000円
助教・助手	60名／ 188名 (31.9%)	6,200,000円
(特任も上記に含む)		
◎分 野	3件	3,000,000円
◎同窓生	620名／5590名 (11.1%)	95,487,671円
(同窓生のうち教員は除く)		
◎学生の父母	62名／1195名 (5.2%)	7,549,885円
◎法人等	67件	46,610,000円
◎篤志家 (団体・個人)	10件	1,200,000円

教員寄附者のご芳名

(平成19年9月30日現在 50音順・敬称略)

医学研究科

教 授 秋田 弘俊、有賀 正、有川 二郎、
今村 雅寛、岩崎 喜信、岩永 敏彦、
近江谷克裕、大野 重昭、笠原 正典、
神谷 温之、川口 秀明、丸藤 哲、
岸 玲子、小池 隆夫、小山 司、
近藤 哲、櫻井恒太郎、櫻木 範明、
佐々木秀直、佐々木文章、清水 宏、
白土 博樹、瀬谷 司、玉木 長良、
玉城 英彦、筒井 裕之、寺沢 浩一、
藤堂 省、西村 正治、野々村克也、
畠山 鎮次、福島 菊郎、福田 諭、
藤田 博美、本間 研一、本間 さと、
前沢 政次、水上 尚典、三浪 明男、
三輪 聡一、武藏 学、森本 裕二、
安田 和則、山本 有平、吉岡 充弘、
渡邊 雅彦

特任教授 眞島 任史

准 教授 秋山 真志、伊東 学、岩永ひろみ、
岡本 洋、折館 伸彦、神山 俊哉、
川村 信明、工藤 正尊、佐々木 了、
篠原 信雄、田川 義継、田中 伸哉、
田中 真樹、傳田 健三、飛騨 一利、
平野 聡、矢部 一郎、吉岡 成人

特任准教授 末永 直樹、藤川 恵子
 講 師 青山 英史、小谷 善久、高野 廣子、
 田島 敏広、七戸 俊明
 助 教 泉 剛、大塚 紀幸、小野寺 伸、
 志賀 哲、武市 紀人、田中 輝明、
 棚橋 祐典、辻 幸子、富居 一範、
 中川 伸、西江 渉、西出 真也、
 古川 洋志、的場光太郎、宮崎 太輔、
 山崎美和子、森松 組子、山口 拓、
 湯浅 資之、吉田 隆行
 特任助教 秋元 秀俊、權 赫準、鈴木 友己
 助 手 鐘ヶ江香久子、中村 利仁、
 中村 秀樹、吉岡 英治
 特任助手 橋本 聡子
 退職者 佐田 文宏、澤村 大輔、高山 千利、
 柴田 雅彦、古田 康、松本真知子

病 院

教 授 浅香 正博、生駒 一憲、松居 喜郎、
 松野 吉宏
 准 教 授 加藤 元嗣、佐藤 直樹、嶋村 剛、
 長 和俊、寺江 聡、遠山 晴一、
 村下十志文
 講 師 阿部理一郎、井上 猛、加賀基知三、
 神島 保、久住 一郎、黒田 敏、
 齋藤 伸治、佐々木 聡、澤村 豊、
 椎谷 紀彦、芝木 晃彦、関堂 充、
 陳 進輝、中丸 裕爾、原林 透、
 髭 修平、本間 明宏、横式 尚司、
 吉田 和彦
 特任講師 樋田 泰浩
 助 教 青柳 哲、安部川智浩、阿部由紀子、
 石黒 信久、石森 直樹、伊藤 圭、

北市 伸義、工藤 與亮、齋藤 航、
 沢口 直弘、鈴木 章之、鈴木 温、
 鈴木 清護、高橋 将人、寺坂 俊介、
 中山 若樹、新野 正明、西 信也、
 畠山 博充、三井 貴彦、宮本 正樹、
 森田 研、矢野 俊介、山田 聡、
 山田 俊

特任助教 北市 雄士
 医 員 伊藤 候輝、賀古 勇輝、栗田 紹子、
 櫻井高太郎、橋本 直樹、増井 拓哉
 退職者 夷岡 徳彦、小川 智生、柏村 正明、
 國原 孝、小玉 和郎、小山 明彦、
 長田 陽一、本間 次郎、宮坂 和男、
 山中 啓義

医学部保健学科

教 授 石津 明洋、小林 清一、齋藤 健、
 酒井 正春、大宮司 信、千葉 仁志、
 八田 達夫、福島 順子、松下 通明、
 松野 一彦、三神 大世、宮本 顯二、
 森下 節子、森山 隆則、山本 徹、
 良村 貞子

准 教 授 加藤千恵次、河原田まり子
 退職者 上野 武治、中村仁志夫、武藤眞佐子
 （退職者は、平成18年9月以降に退職された方）

第32号に掲載した教員寄附者のご芳名に、下記の方の
 掲載漏れがございましたので訂正をさせていただきます
 す。深くお詫び申し上げます。

伊藤 候輝、賀古 勇輝、栗田 紹子、櫻井高太郎、
 橋本 聡子、橋本 直樹、増井 拓哉、小川 智生、
 長田 陽一、本間 次郎、武藤眞佐子、森田 研、
 山中 啓義（敬称略）

第50回東日本医科学生総合体育大会

東医体評議委員 大 草 卓 也（医学科3年）

第50回東日本医科学生総合体育大会が東海大学医学
 部、千葉大学医学部、東京大学医学部、北里大学医学部
 の4大学が主管校となり夏季部門が8月上旬に開催され
 ました。

本学からは14団体が出場しました。主な成績は以下の
 とおりです。



ソフトテニス女子 3位
バレーボール男子 準優勝
水 泳 3位

また冬季部門はスキーが菅平高原スキー場にて3月中旬に、アイスホッケーが軽井沢スケートセンターにて12月下旬に開催される予定です。

なお、前回の49回大会ではスキー男子が優勝、女子が3位となり本学は総合7位(36校中)となりました。



お知らせ

◆ 平成19年度 医学研究科・医学部医学科「優秀研究賞」、 「優秀教育賞」、「優秀論文賞」及び「特別賞」受賞候補者の推薦 ◆

医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の顕彰に関する内規に基づく、平成19年度各賞（優秀研究賞、優秀教育賞、優秀論文賞、特別賞）受賞候補者の推薦を平成20年1月4日（金）～平成20年1月31日（木）の期間受け付けます。（優秀研究賞、優秀教育賞及び優秀論文賞は、自薦も可）

○賞の種類及び対象

- (1) 優秀研究賞：顕著な研究業績をあげた専任教職員
- (2) 優秀教育賞：顕著な教育業績をあげた専任教職員
- (3) 優秀論文賞：特に優れた論文を発表した専任教職員・学生等
- (4) 特別賞：医学研究科、国内又は国際社会に顕著な貢献をした専任教職員・同窓生

○各賞の人数及び副賞額

- ① 優秀研究賞・優秀教育賞：年に各1名、副賞は1人当たり100万円相当
- ② 優秀論文賞：年に若干名、副賞は1人当たり10万円相当
- ③ 特別賞：副賞は、1人（1件）当たり100万円相当

○提出書類：受賞候補者推薦書及び候補者調書

○推薦書等の提出先：医学系事務部総務課庶務担当

○受賞候補者推薦書・候補者調書の請求先：

E-mail: shomu@med.hokudai.ac.jp

◆ 医学研究科修士課程入試説明会の開催について ◆

昨年度に引き続き、修士課程の入試説明会が去る7月21日（土）午後1時から第3講堂で開催されました。（参加者22名）

説明会では、今年度から新たに導入された3つの教育コースについて、吉岡副研究科長から設置経緯・目的、

カリキュラム等について、又、平成20年度の学生募集出願手続き及び選抜方法等について順次、説明されました。その後の質疑・応答では、参加者から長期履修、入学科・授業料の免除申請手続き等について、質問が寄せられました。

◆ 学位審査「中間審査トライアル」の実施について ◆

平成19年度博士課程入学から学位審査については中間審査と最終審査の2段階方式で実施されます。この内、中間審査については学生の論文作成状況が予め審査員の

想定する年次進行相当レベルに達しているか否かを判定するものではなく、中間審査で発表（報告）される学生個々の研究進捗状況及び学位論文作成状況等の内容に応

じ、審査員の指導・助言をもって、標準修業年限4年で課程修了できるよう導くことを目的とされ、公開で実施することになっております。

本格実施は現1年次学生が3年次進級後の平成21年度第1学期に実施されますが、実施にあたっての諸手続き及び審査方法について、予め決めておく必要があることから研究科内に学位審査トライアル実施委員会（委員長：研究科長）が設置され、去る8月2日（木）各分野から推薦された現3年次学生8名を対象に2グループに分け、第3・4講堂において中間審査トライアルが実施されました。

中間審査トライアルでは、審査員に指導教員の他、学

位審査トライアル実施委員会委員2名を加え3名構成で、学生から事前に提出された「学位論文進捗状況報告書」及び公開発表資料に基づき実施され、審査員から発表内容に対する質問・意見が、学生からは今後の研究及び論文作成に係る助言を審査員に求める等、活発な意見交換の場となりました。

今後は、中間審査トライアルの結果を踏まえ改善すべき事項及び本格実施の際の審査員の選出方法等の検討を行い、中間審査の目的・実施方法等を中間審査要領としてまとめ、教員・学生への周知を図ると共に平行して最終審査に向けての諸手続き・審査方法について検討する予定です。

◆ 医学部医学科卒業試験日程 ◆

今年度の卒業試験は、9月10日（月）～11月14日（水）の日程で、医学部図書館3階特別会議室において実施されております。

なお、卒業認定は平成20年2月14日（木）開催の医学科会議で決定され、翌15日（金）に掲示により発表する予定です。

◆ 平成19年度医学部医学科 学士編入学（第2年次第2学期）試験結果について ◆

平成19年度医学部医科学士編入学（第2年次第2学期）試験（募集人員5人）について、7月28日（土）第1次選抜試験、8月16日（木）実施の第2次選抜試験を経て、8月31日（金）に最終合格者5人を発表いたしました。

入試データ

志 願 者	317人（男205人、女112人）
第1次選抜受験者	268人（男177人、女91人）
合格者	32人（男21人、女11人）
第2次選抜受験者	31人（男20人、女11人）
最終合格者	5人（男1人、女4人）

今回から、第2年次（第2学期）に編入することとなりました。

◆ 医学部保健学科3年次編入学試験結果 ◆

平成20年度保健学科3年次編入学試験が9月1日（土）に実施され、9月21日（金）合格者20人が発表されました。

なお、入学手続き期間は10月10日（水）～12日（金）となっています。

入試データ

専 攻 名	募集人員	志願者	受験者	合格者
看護学	10	41	41	10
放射線技術科学	3	11	11	3
検査技術科学	3	6	6	4
理学療法学	2	1	1	1
作業療法学	2	3	3	2

◆ 第102回医師国家試験について ◆

来春2月に実施される第102回医師国家試験の日程が7月2日付けの官報により次のとおり公表されました。

出願期間	平成19年11月16日(金)～12月6日(木)
試験日	平成20年2月16日(土)・17日(日)・18日(月)
合格発表日	平成20年3月28日(金) 午後2時

なお、願書等の書類の提出については、北海道厚生局からの要請により一昨年度から、卒業見込み者については、医学科教務担当で願書等取りまとめ、一括して提出することになりました。具体的な日程・方法等については、決定次第お知らせいたしますが、出願期間が昨年度同様、例年より3週間程度早くなっていますので、受験予定者にあつては提出期限の厳守等、ご協力をお願いします。

◆ 平成20年度大学院入学試験について ◆

去る、9月3日(月)に修士課程、9月5日(水)に博士課程(前期)の入学試験が実施され、9月21日(金)にそれぞれ合格者が発表されました。

各課程の志願者・受験者・合格者は次のとおりです。

課程 区分	修士課程	博士課程(前期)
志願者	32名(男18名、女14名)	29名(男22名、女7名)
受験者	31名(男17名、女14名)	29名(男22名、女7名)
合格者	27名(男14名、女13名)	25名(男20名、女5名)

なお、上記の結果、修士課程については、2次募集を実施することになりました。

修士課程の2次募集及び既に公表している博士課程(後期)募集日程は、次のとおりです。

課 程 事 項	修士課程(第2次募集)	博士課程(後期)
出願資格審査 申請期間	平成19年11月19日(月)～11月26日(月)	
入試説明会	平成19年12月8日(土) 13:00～	
出願期間	平成19年12月17日(月)～ 12月25日(火)	平成19年12月10日(月)～ 12月17日(月)
試験日	平成20年1月28日(月)	平成20年1月30日(水)
合格発表日	平成20年2月29日(金)	

◆ 第3回(平成19年度)北海道大学大学院医学研究科・

医学部医学科音羽博次奨学基金奨学金授賞式について ◆

今年度で第3回目となる「北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金要項」に基づく、奨学金授賞式が去る9月18日(火)15時から第3会議室において挙行されました。

応募者は22名(内、外国人留学生4名)で、選考の結果、次の13名に奨学金が授与されました。

医学科4年	前川 聡
医学科5年	熊倉 陽介
医学科5年	辻岡 孝郎
医学科6年	吉田 篤司
修士課程1年	長崎 暁理
博士課程1年	夏賀 健
博士課程1年	柳 輝希
博士課程3年	堀江 幸弘

博士課程4年	梶 康一
博士課程4年	新田 卓也
博士課程4年	Darmanin Stephanie
博士課程4年	趙 莞
博士課程4年	董 培新



◆ 平成19年度各種助成の採択状況 ◆

10月1日現在
単位：円

財 団 法 人 等	種 別	氏 名	交 付 金
(財) 武田科学振興財団	一般研究奨励	西屋 禎	2,000,000
(財) 伊藤医薬学術交流財団	交流助成	笠原 敏史	200,000
		齋藤 亮	200,000
		武市 紀人	200,000
		田中 伸哉	200,000
		馬場 謙吉	200,000
		松尾 淳司	200,000
		矢部 一郎	200,000
	招聘助成	西村 正治	300,000
	学会等助成	川口 秀明	300,000
(財) 秋山記念生命科学振興財団	研究助成金（一般助成）	北村 信人	1,000,000
		城谷 圭朗	1,000,000
		田中 伸哉	1,000,000
		渡辺 雅彦	1,000,000
	研究助成金（奨励助成）	西江 渉	500,000
		富居 一範	500,000
(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団	加藤記念国際交流助成	西原 広史	200,000
(財) 大川通信基金	研究助成	横澤 宏一	1,000,000
(財) 三菱財団	自然科学研究助成	押海 裕之	3,000,000
		島 明子	700,000
(財) 武田科学振興財団	研究奨励継続助成金	小田 淳	1,500,000
ノーステック財団	若手研究補助金	犬伏 正幸	399,000
		大川原辰也	400,000
		絹川真太郎	400,000
		笹井 研	400,000
		西屋 禎	400,000
		堀之内孝広	400,000
	共同研究補助金	安田 和則	1,000,000
		山内 太郎	600,000
		吉永恵一郎	1,000,000
	研究開発シーズ育成補助金	近江谷克裕	2,000,000
(財) 持田記念医学薬学振興財団	研究助成金	押海 裕之	1,000,000

◆ 平成19年度科学研究費補助金採択状況 ◆

医学研究科・医学部

(単位：千円)

研 究 種 目	新規申請数	継 続 数	平成19年度	
	件 数	件 数	件 数	交付金額
若手研究 (S)	5	0	0	0
若手研究 (スタートアップ)	5	3	6	7,190
特別研究促進費	1	0	1	2,000
合 計	11	3	7	9,190

医学研究科

研 究 種 目	新規申請数	継 続 数	平成19年度	
	件 数	件 数	件 数	交付金額
若手研究 (S)	5	0	0	0
若手研究 (スタートアップ)	3	1	3	4,070
特別研究促進費	1	0	1	2,000
合 計	9	1	4	6,070

医学部

研 究 種 目	新規申請数	継 続 数	平成19年度	
	件 数	件 数	件 数	交付金額
若手研究 (S)	0	0	0	0
若手研究 (スタートアップ)	2	2	3	3,120
特別研究促進費	0	0	0	0
合 計	2	2	3	3,120

広報室便り 2

第32号の広報誌からは、ホームページ上ではカラーのpdfで見ることができるようになっておりますので、ぜひご覧ください。北海道大学医学研究科・医学部の新しいホームページの準備がいよいよ整いつつあります。田中真樹先生、佐藤松治先生、鈴木正己さんたちが優れたアイデアを出してくれており、よいものになってきました。あとは、皆様からのホットな情報を「お知らせ・ニュース」にどしどし頂ければ、よりよいホームページになっていくと思います。学会情報、受賞情報、イベント情報など、ぜひ広報室までお知らせください。なお、皆様の記事の掲載方法についてはトップページ→お知らせ・ニュースから「お知らせ・ニュース」ページへの記事掲載についてをクリックしていただくとわかります。

広報室長 白土 博樹

編集後記

医学研究科・医学部広報第33号をお届けします。今年度から年4回の発行となり、各号の記事が減ることを心配していましたが、本号もまた大変充実した内容となっております。お忙しいところ原稿をお寄せ下さいました皆様に感謝いたします。本号には夏の行事としてすっかり定着したオープンキャンパスや学生教育ワークショップの記事が掲載されています。私も5年ぶりに医学科のワークショップに参加し、多くの先生方の熱意に頭の下がる思いがしました。本号には他にも医学研究科・医学部で行なわれている種々の活動や新しい試みに関する記事が多数掲載されており、この大きな組織の中に様々な思いが息づいているのを感じます。近々リニューアルされる予定のホームページと併せ、この広報誌が構成員のための良き情報媒体としてお役に立てば幸いです。なお、ホームページでは広報誌のカラー版をみるができます。どうぞご利用ください。

(田中 真樹)

Home Pageのご案内

医学研究科／医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受付けメールアドレスは、

kouhou-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発 行 北海道大学医学研究科・医学部広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学系事務部総務課庶務担当

電 話 011-706-5892

編集委員 近江谷克裕、山本 有平、田中 真樹
佐藤 松治、西岡 健、平塚 志保